

論文

Shakespeare Production履修生にみるspeaking力の変化

— 動機づけと集中的な英語表現の訓練がもたらす効果に関する考察 —

¹辻 英子 ²布施 邦子
¹Timothy L. Medlock ¹今井 由美子

¹同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・准教授²同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・嘱託講師Changes in the Speaking Ability of
Shakespeare Production Students

— A Study of Motivation and the Effects of Intensive Training in English Expression —

¹TSUJI Hideko ²FUSE Kuniko
¹Timothy L. Medlock ¹IMAI Yumiko

¹Department of English, Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor²Department of English, Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Lecturer

Abstract

The English Department of Doshisha Women's College of Liberal Arts offers a subject called Shakespeare Production (SP), which has a history of nearly 70 years. The aim of this course is for students to study a whole Shakespeare play in preparation for its public performance in the original language. In this study, we investigated changes in the speaking ability of SP students from two perspectives: the motivation for English learning of 4th-year students and the effect on them of SP's intensive training in English expression. In looking at the results, we found that although there was an overall increase in their speaking ability, the motivational survey revealed some problems with students' strategies related to speaking skills.

1. はじめに

本学の英語英文学科にはシェイクスピア劇を原語で上演するShakespeare Production（以下SP）という科目が開講されている。SPは選択科目であり、履修生は3年次で上演予定の作品について深く学び、4年次では一般公開形式による舞台上演に向けた本格的な練習を重ねてゆく。1951年の第1回上演から69年間続く歴史をもつSPに参加することを目指して本学に入学する学生も多い。

英語教育においてスピーキング力の向上のためにドラマ

的手法を題材として取り入れることは、従来からその効果が注目され、近年、数多くの取り組みがなされてきた。しかしながら、その多くが、児童向けの英語教室や、小学校、中学校、高等学校の教室において、簡単な劇形式の教材を用いて日常会話の言い回しを暗記させるといったレベルにとどまっており、戯曲作品の文化的背景をふまえた解釈に基づく表現研究という位置づけで上演される例は少ない。従って、大学生による本格的な英語劇の上演を通して学習者のスピーキング能力向上を測定するという試みは、まだ、十分に検討されているとは言えないのが現状である。

本研究は、難解なシェイクスピア劇の上演を通して、そこに参加する学生たちが、一定期間集中的に英語音声表現の訓練をすることによって、スピーキング力がどのように向上するかを、客観的に測定しようとするものである。本学の Shakespeare Production の70年近い歴史の中でこのような研究に取り組むことは初めての試みであり、学際的な視野に立った指導とその効果を検証する。

2. 背景

2.1 先行研究

奥村（2004）は、ゼミ生にアメリカの現代劇を上演させた経験を踏まえ、その効果として英語の発音やリズム、イントネーションが向上することをゼミ生に行ったアンケート結果などを基に示した。しかしながら、「英語劇の練習が、学習者の英語発話能力にどのような効果をもたらすのか。客観的なデータで示すことは、今の私にはできない」（p. 15）として、その成果の客観的なデータ提示の難しさを認めた。

桑山（2009）はかつて本学のSPの指導をしていた経験を基に、シェイクスピア劇の原語上演が英語力向上に効果がある可能性を詳細に示してはいるものの、上演後の学生たちのスピーキング力の向上を示す具体的なデータの報告はなかった。

吉村（2018）は、「英米社会文化論基礎演習」という語学としての英語の授業ではない科目において受講生たちにシェイクスピア劇を上演させ、そのアクティブ・ラーニングとしての成果を報告した。その中で、劇に参加した学生たちのTOEICの平均スコアが上がったことを挙げ、「英語劇を経験したからスコアが伸びたのかどうかを実証することは難しいが、少なくとも英語劇に参加した学生の多くはTOEICスコアの上でも大きな成果を上げていることは確かである」（p. 50）と述べ、英語劇による語学力向上をデータで示した。

現在、日本の大学において、シェイクスピア劇上演を行っているのは、関東学院大学、明治学院大学、甲南女子大学などいくつか存在するが、正規の授業としてシェイクスピア劇を2年間かけて研究し上演するという試みは、本学の稀有な取り組みであると言える。

2.2 シェイクスピア上演の歩み

SPの歴史は、1951年、同志社女子専門学校英文科の学生有志による学内での*Macbeth*（『マクベス』）上演に端を

発し、1953年には「シェイクスピア・イブ」という名称で同志社創立記念行事（EVE）の一環として一般公開となった。初期には学生のみならず、英文科の日本人教員による前座としての*Hamlet*（『ハムレット』）上演やネイティブ教員による「ドラマティック・リーディング」の披露、上演前の音楽科の教員や学生有志によるエリザベス朝音楽の演奏、さらには家政学部の教員による衣装制作指導など、当時のシェイクスピア劇上演は英文科の枠にとどまらず全学的な協力に基づく行事であった（同志社女子大学 pp. 170-171）。

1975年の英文学科カリキュラム改正により、SPは課外活動から正規の学科科目になり、単位認定されるようになった。具体的には3年次における作品講読を中心とした必修科目「シェイクスピア研究」（通年4単位）に続き、4年次で週2回の選択科目「Shakespeare Production」（通年4単位）として位置づけられた。この決断には学科内でも賛否両論があったようだが、この時期を転機に上演品目も一気に増え内容の充実が図られていった。その後、英文学科が英語英文学科へと名称変更した1994年には、それまでの3年次での必修科目「シェイクスピア研究」が廃止され、「Shakespeare Production I」（通年4単位）という選択科目になった。続く4年次の「Shakespeare Production II」は8単位（通年）の選択科目になり、舞台上演により焦点を当てた科目内容となった。さらに2000年のセメスター制導入に伴い、3年次が「Shakespeare Production I」（春学期2単位）、「Shakespeare Production II」（秋学期2単位）、4年次が「Shakespeare Production III」（通年8単位）という現在の形になった。その間に上演場所は今出川キャンパスの栄光館から京田辺キャンパスの新島記念講堂へ、そして2009年の表象文化学部設立を機に再び歴史と伝統のある栄光館に戻った。しかし、照明・音響設備の整った新島記念講堂から栄光館への移行は、照明・音響効果の調整に様々な困難を伴い、現在も試行錯誤を続けている。一方で、今出川キャンパスという場所の利を得て、観客動員数は良好となった。

3. 本研究の目的

本学の英語英文学科では、一人一人が目指す到達目標のレベルに差こそあれ、入学時に殆どの学生が「スピーキングの力を伸ばすこと」を目標に掲げる。しかし、語学習得は一朝一夕では達成できないものであり、目標を見失わずに各自の英語力に見合った方法で地道な努力を継続する

ことが求められる。英語劇を原語で舞台上演するという目標に向かうSP履修生には明確な動機づけがある。吉村(2018)は、上演によるTOEICスコアの向上を認めたが、TOEICにより測定できるのはリスニングとリーディングの能力であり、スピーキング能力を客観的に測るものでない。そこで本研究では、大学4年次生の英語学習に対する動機づけと集中的な英語表現トレーニングがもたらす効果という2つの視点から、SP履修生のスピーキング力の変化を調査することを目的とした。

4. 調査方法

4.1 Oral Proficiency Interview-computer (OPic)

本研究で用いたOPicは、ACTFL (the American Council on the Teaching of Foreign Languages、全米外国語教育協会)が開発した評価ガイドラインに沿ってコンピューターを利用して学習者のコミュニケーション力を測定する40分のテストである。対象は5言語(英語、中国語、ロシア語、スペイン語、韓国語)で、日本では英語のみが実施されている。このテストはこれまで40カ国以上で導入され受験者は約60万人を超えており、外国語コミュニケーション能力評価テストのグローバルスタンダードとされている(www.global8.or.jp/whatsopic01.html)。表1はテストの概要である。

表1. OPicとは

対象言語	英語
テスト時間	約160分(オリエンテーション20分、テスト最大40分)
出題内容	Background Surveyを通じて個人に合わせた問題を出題 例えば、職業、レジャー、趣味、関心事、スポーツ、旅行などのトピック
評価基準	ACTFL※ Proficiency Guidelines-Speaking OPic level 1 ~ 7 (Novice Low ~ Advanced Low)
問題数	12 ~ 15問(個人によって異なる)
テストの特長	<ul style="list-style-type: none"> さまざまな方法で「話せる」状況を実現 実践的なコミュニケーション力を測る評価方法 高い利便性
評価要素	<ul style="list-style-type: none"> Function / Global Tasks (コミュニケーション継続能力) Text Type (文章構成力) Contents / Context (状況に応じた表現力) Comprehensibility (質問意図の把握能力) Language Control (文法・語彙・流暢さ・発音) 一つの評価領域に偏らず、受験者の会話を総合的に評価

※ACTFL : The American Council on the Teaching of Foreign Languages

(<http://www.global8.or.jp/whatsopic01.html>より引用したものを元に著者が作表)

実施に際しての所要時間は約60分(オリエンテーション20分、テスト時間は最大40分)で、オリエンテーションではBackground Surveyを通して、職業、経験、関心分野など受験者の好みについて調査が行われ、テストに対する安心感と発話における量的確保の工夫がなされている。また、self-assessment 方式をとっており、コミュニケーション能力に対する受験者本人の申告により個々のレベルに合わせた出題を設定することができる。受験者により差はあるが平均出題数は12問から15問で、テスト時間40分のなかで受験者のペースで実践的言語駆使能力が判定される。コミュニケーション継続能力、文章構成力、状況に応じた表現力、質問意図の把握力、文法・語彙・流暢さ・発音の5つの評価要素から受験者の会話力を総合的に評価するもので、一つの評価領域に偏らない点も特徴的である。

OPicでは受験生の生活の英語使用の場において「どの程度効果的かつ適切に駆使できるか」を判定する。Novice (Low・Mid・High)、Intermediate (Low・Mid・High)、Advanced (Lowのみ)のレベルがあり、Novice Low(限定的ではあるが単語を羅列し話すレベル)からAdvanced Low(自分の考えや経験を流暢に表現できるレベル)までの7段階評価を用い判定する。Intermediate Midレベルにおいては、さらにMID3(上)、MID2(中)、MID1(下)に細分化されるため、全部で9つのレベルによる判定が可能となる。表2はOPicで判定可能な言語能力をまとめたものである。表中の右端の数字は、OPicによる判定レベルのNovice LowからAdvanced Lowの9段階評価を、本調

表2. OPicで判定可能なレベル

Level	言語能力	得点
Advanced	LOW	9
	HIGH	8
Intermediate	MID	7 (MID3) 6 (MID2) 5 (MID1)
	LOW	4
	HIGH	3
Novice	MID	2
	LOW	1

(<http://www.global8.or.jp/whatsopic01.html>より引用したものを元に著者が作表)

査のために得点化（1点～9点）し著者により追加された（表2）。

4.2 Shakespeare Production III

「Shakespeare Production III」においてはキャスト（演者）とスタッフ（アシスタント・ディレクター、広報・渉外担当のコミッティー、字幕、照明・大道具、音響、衣装・メイク・小道具）に担当が分かれる。指導教員は毎年、登録人数などを考慮したうえで、上演時間が2時間程度の長さになるようシェイクスピアの原作を5分の3程度に短縮した上演用台本を作成する。4年次になり台本が配布されると、SP履修生は「専任キャスト」「専任スタッフ」、キャストとスタッフの両方を兼ねる「兼任スタッフ」のいずれかの立場を決める。キャスト希望者は4月末に実施されるオーディションを受け、全ての配役とスタッフが決定した後は各自の役割に主体的に取り組み、11月初旬の公演本番までの約6ヵ月間、舞台上演へ向けた準備を進める。2017年度の上演作品は *A Midsummer Night's Dream*（『夏の夜の夢』）で、履修生32名中3名が専任キャスト、11名が専任スタッフ、18名が兼任スタッフとなった。例年であれば専任キャスト、専任スタッフ、兼任スタッフは履修生の概ね3分の1ずつに分かれるが、この年は履修者数が少なく、兼任スタッフが半数を超えることになった。

4.3 手続き

英語学習に対する動機づけについてはSP履修生に特化した調査ではなく、2017年5月に英語英文学科に在籍していた4年次生を調査対象とし、質問紙による「英語学習に関する意識調査」（資料1）を実施した。所要時間は15分程度であった。

SP履修生の調査協力者は2016年度（3年次）の春学期「Shakespeare Production I」、秋学期「Shakespeare Production II」および2017年度（4年次）通年の「Shakespeare Production III」の全てを履修した英語英文学科4年次生32名で、スピーキング力向上の評価についてはOPIcテストを利用した。SP履修生は、担当と配役決定後の2017年5月中旬にPre-Test、舞台上演終了後の11月下旬にPost-testとしてこのOPIcを2度受験した。さらに、SPにおける学びを振り返り、英語劇の上演と自身の英語力や英語学習についての考えを尋ねるための「公演終了後の意識に関するアンケート調査」（資料2）を11月下旬に実施した。所要時間は15分程度であった。

英語学習に関する意識調査は127名、OPIc受験者は32名、

SP上演後のアンケート回答者は28名の回答であった。

5. 結果と考察

5.1 質問紙による英語学習に関する意識調査

5.1.1 得意なスキルとその学習方法

英語学習に関する意識調査（全15問）のなかで、英語の4技能について最も得意なスキルは何か（Q3）と尋ねたところ、Listening（72）、Reading（33）、Writing（14）、Speaking（8）の順に「得意だ」とする回答が得られた（図1）。

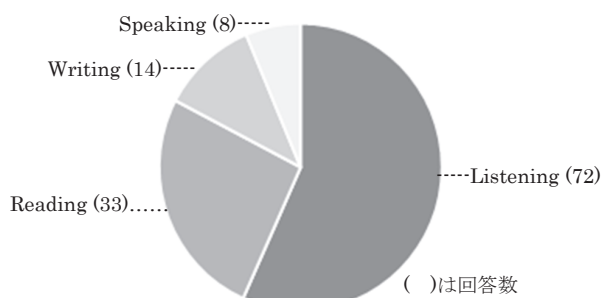


図1. 最も得意とするスキル

さらに、得意と感じているスキルについて効果的であったと思う学習方法をIndividual型（個人的練習が可能、Q4）とCommunication型（練習相手が必要、Q5）に分け、それぞれ複数選択式で回答を求めた。得意なスキル（Q3）と効果的な学習方法（Q4およびQ5）についてクロス集計による分析を行った。表3は得意なスキルと効果的なIndividual型学習方法のクロス集計の結果をまとめたものである。Individual型で多数回答を得たのは、「映画やDVD、テレビ・ラジオを視聴する」（61）、「洋楽を聴くとき歌詞を確認する」（54）、「語彙を意識的に増やす」（45）、バイリンガル放送や英字新聞といった媒体を活用して「英語に触れる」（45）、の4項目であった。ここでは、学習者個人が自分の興味や関心に沿った視聴覚素材に触れる機会をもち、語彙を中心に意味を確認することが効果的だと考えていることがわかる。一方で、「文法を復習する」（17）、「英語で物語や小説を読む」（15）、「英語で文章を書く」（15）、「ラジオやテレビの講座を利用する」（10）、「音読を心掛ける」（8）といった基礎的なストラテジーの活用については効果的だと評価されていないことがわかった。

表4は得意なスキルと効果的なCommunication型学習方

表 3. 得意なスキルと効果的なIndividual型の学習方法

(複数回答可、数字は回答数)

Individual 型	Reading	Writing	Listening	Speaking	合計
1) 語彙を増やす	19	10	13	3	45
2) 文法復習	9	5	3	0	17
3) 英語に触れる	6	3	30	6	45
4) 英語で読む	5	1	6	3	15
5) 英語講座を視聴する	0	0	9	1	10
6) DVD、TV、ラジオを英語で視聴する	8	2	47	4	61
7) 洋楽の歌詞を確認する	8	3	38	5	54
8) 音読を心がける	0	1	4	3	8
9) 英語で文章を書く	4	3	5	3	15
10) 知見を広める	4	0	9	1	14

表 4. 得意なスキルと効果的なCommunication型の学習方法

(複数回答可、数字は回答数)

Communication型	Reading	Writing	Listening	Speaking	合計
1) 語学教室に通う	7	2	14	1	24
2) オンライン・レッスンを受ける	2	0	2	0	4
3) 英語でプレゼンテーションをする	11	5	17	2	35
4) 英語母語話者とコミュニケーションする	5	3	40	3	51
5) 英語を共通語としてコミュニケーションする	1	1	16	5	23
6) SNSを利用して英語でやりとりする	6	3	17	2	28
7) Skypeを利用して英語でやりとりする	1	1	3	1	6

法のクロス集計の結果をまとめたものである。Communication型で効果的であったと思う学習方法として比較的多数の回答を得たのは、「英語母語話者とコミュニケーションをする」(51)、「英語でプレゼンテーションをする」(35)、「SNSを利用して英語でやり取りする」(28)、「語学教室に通う」(24)、「英語を共通語としてコミュニケーションをする」(23)の5項目であった。特に「母語話者とのコミュニケーション」はリスニングを得意と感じている回答者との間に、カイ2乗検定において0.01%水準で有意な相関関係が認められた。一方で、「Skypeなどを利用し英語でやり取りする」(6)や「オンライン・レッスンを受ける」(4)といったインターネットを利用したライブでの練習は少数派であった。

5.1.2 苦手なスキルとその学習方法

英語の4技能で最も苦手なスキルを尋ねたところ(Q2)、Speaking (75)、Reading (27)、Writing (19)、Listening (6)の順で「苦手だ」という回答が得られた(図2)。

続くQ6では、「なぜ(そのスキルを)苦手だと感じているか」について、①～⑥の項目ではまるものを選択してもらった。その結果は、52%の学生が「練習しない」(67)を選び、35%の学生が「自分に合った練習の方法が

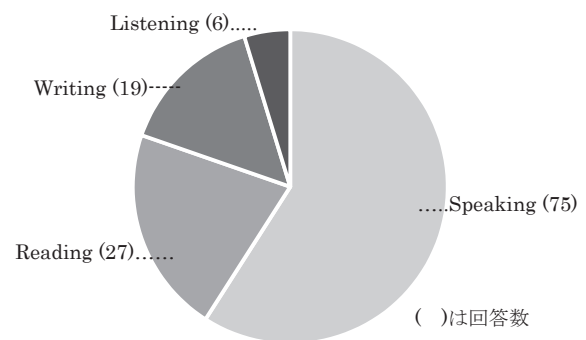


図 2. 最も苦手とするスキル

わからない」(44)を選んだ。一方で、苦手を感じる理由として「努力しても結果として現れない」(18)、「そのスキルが好きでない」(12)、「そのスキルに重要性を感じない」(5)、「努力しても無駄だと思っている」(1)の4項目を選択した学生は極めて少なかった(表5)。回答した学生たちは、苦手と感じているスキルを必ずしも嫌いだということではなく、そのスキルを軽視しているわけでもないようだ。また、80%以上の学生が努力をすれば結果につながると考えてはいるものの、過半数は苦手意識の原因を練習不足だと認識していることがわかる。実際に30%以上の学生が「練習の仕方がわからない」と答えており、このこ

表5. 苦手なスキルを「苦手だと感じる」理由 (Q6)

Q6「なぜ苦手だと感じるのか」(複数選択可)	選択した人数 (127人中)	選択しなかった人数
1) 練習しないから	67	60
2) そのスキル自体が好きでないから	12	115
3) そのスキルに重要性をあまり感じないから	5	122
4) 努力しても無駄だと思っているから	1	126
5) 努力していてもなかなか結果として表れないから	18	109
6) 自分に合った練習の仕方がわからないから	44	83

表6. Pre-testとPost-testの平均点におけるt検定

	対応サンプルの差	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の95%信頼区間		t値	自由度	有意確率(両側)
					下限	上限			
ペア1 Pre-Post		-40625	.71208	.12588	-66298	-.14952	-3.227	31	.003

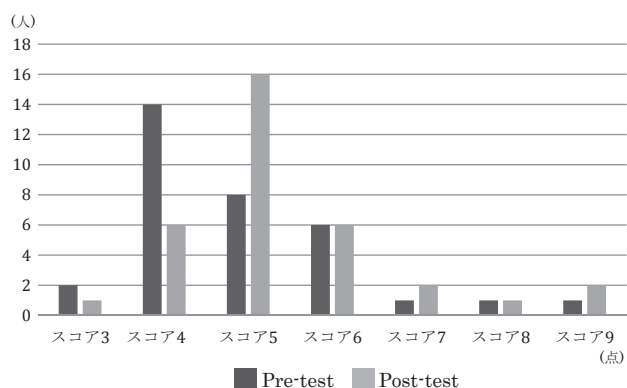


図3. OPIcスコア平均点の比較

とが練習不足につながっているのではないかと推測される。

5.2 OPIc

OPIcはACTFL公認のOPIc Rater による採点で決定されたレベル (Novice Low からAdvanced Low) を1点～9点に得点化(表2)し、調査協力者のPre-test(5月中旬)およびPost-test(11月下旬)の平均点を求めた。平均判定レベルは、Pre-testにおいて4.8点、Post-testにおいて5.3点となり、全体として Intermediate Low からIntermediate Mid (MID1) への言語能力の伸びを見せた(図3)。

6ヶ月に及ぶ集中的な上演準備を始める前(Pre-test)と11月上旬の公演後(Post-test)における調査協力者のOPIc平均点に差があるかどうかを検証するために、対応のあるt検定を行った。その結果、平均値間に統計的に有意な差が認められ($t(31) = 3.3, p < .01$)、Post-test平均点はPre-test平均点より有意に高くなっていることがわかった(表6)。

5.3 SP講演終了後の意識調査

SP公演終了後アンケートに回答した28名の内訳は、担当別に、専任キャスト(3名)、アシスタント・ディレクターとコミッティーを除いた専任スタッフ(以下、専任スタッフ、5名)、キャスト・スタッフ兼任(以下、兼任スタッフ、16名)、アシスタント・ディレクター/コミッティー(以下、A/C、4名)であった。4月と11月(公演後)で「英語を使うこと」に対する態度や考え方に変化があったかを問う質問(Q3)に対し、「ある・どちらかといえあればある」という回答は21名であった。専任スタッフは5名中3名が「あまりない・ない」、2名が「どちらかといえあればある」と回答しており、英語に対する意識変化を強く感じたものは一人もいなかった。

次に、4月と11月(公演後)で英語の4技能(読むこと、書くこと、話すこと、聴くこと)に対して抵抗感がなくなったかどうかを尋ねた(Q4)。担当(専任キャスト、専任スタッフ、兼任スタッフ、A/C)ごとにクロス集計を行ったところ、「読むことに対する抵抗がなくなった」と回答したのは専任キャストでは3名全員が、またA/C担当は4名中1名であった。また「書くこと」については「抵抗がなくなった」と認識しているのは28名のうち8名にとどまっており、これはSPが演劇上演を目的とした科目でありwritingスキルを練習する機会がほとんどなかったためであろうと推測できる。さらに、「話すこと」については、兼任スタッフでは12名が「抵抗がなくなった」と回答したのに対して、A/C担当では4人全員が「抵抗がなくなった」とは回答していない。最後に「聴くこと」に対して「抵抗がなくなった」と回答したのは、兼任スタッフ16名のうち9名であった。7名がその認識をしておらず、こ

図4. 英語を使うことに対しての抵抗感

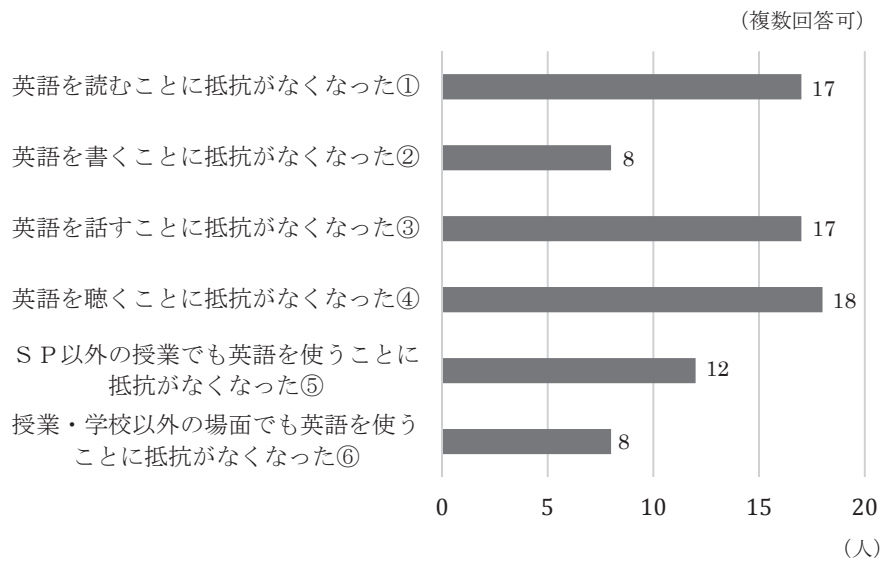
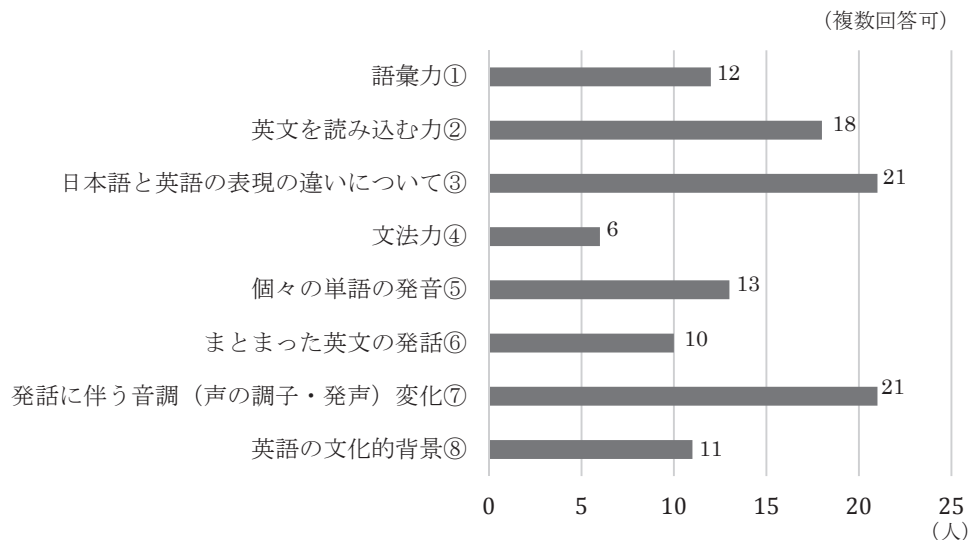


図5. SPが言語学習の何に役立ったか (Q7)



れはおそらく担当した作業の内容によって大きく分かれたものと思われる。また、A/C担当は全員が「聴くこと」への抵抗感はなくなったと回答している。上演時の「Shakespeare Production III」は日本人教員がディレクターであったが英語母語話者の教員も指導に深くかかわっており、打ち合わせや運営全体の相談をする際に英語によるコミュニケーションが必要であったA/C担当者にとって、日常的に英語を使う機会が確実に増えたことによる結果だと考えられる。

Q5では英語で演劇を上演するという授業は英語力の向上に効果があるかどうかを尋ねた回答者27名のうち「英語で演劇を上演する」ことの効果は9名が「どちらかといえばある」、18名が「ある」と回答した。SPにおける担当に関係なくほぼ全員が、英語で演劇を上演することは英語

力向上について効果があると評価した。この27名について、Q4においてどのスキルに「抵抗がなくなった」と感じているのかを確認したところ (図4)、「読むこと」および「話すこと」について抵抗がなくなったと回答した学生は17名ずつ、「聴くこと」への抵抗がなくなったものは18名であった。一方で「書くこと」に対しては8名にとどまっている。

図5はSPの授業が「言語学習」という観点から役立ったと思われる点を尋ねた結果である (Q7、複数回答可)。
②英文を読み込む力 (18)、③日本語と英語の表現の違いについて (21)、⑦発話に伴う音調変化 (21) の3項目については評価が高かった。②英文を読み込む力については、兼任スタッフ・A/Cのそれぞれ過半数以上が、また専任キャストは3名全員が役に立ったと認めている。③日本

語と英語の表現の違いについては専任スタッフ5名のうち4名が役立ったと回答した。おそらくこれは、日本語による字幕作成の担当スタッフの回答であろうと推測される。字幕作成担当者は英語の表現に対して字数制限のなかで確かな日本語表現を考えねばならず、日本語と英語の表現の隙間を埋めることに膨大な時間を費やしたからであろう。⑦発話に伴う音調については、兼任も含めキャストのほぼ全員が役に立ったと答えている。上演に直接かかわる項目であるだけでもっともな結果であると考えられる。また、①語彙力(12)、⑤個々の単語の発音(13)、⑥まとまった発話(10)、⑧英語の文化的背景(11)の4項目ではそれぞれ3分の1以上の支持を得た。⑤についてはA/C全員が、⑧については専任スタッフ全員が効果があったと回答しているのは興味深い。SPの中でそれぞれが担っている役割によって、英語とのかかわり方や関心の違いがこのような形で表れたと推測する。④文法力(6)については役に立ったと感じていない学生が多かった。16世紀に書かれた英語の文法が、現代の英語学習者にとって直接役に立ったと実感できないことは自然なことであろう。

6. まとめ

本研究の目的は、動機づけと集中的な英語表現トレーニングがもたらす効果という2つの視点から、SP履修生のスピーキング力の変化を調査することであった。SP上演練習が解釈や表現といったオーラル・インタープリテーションの力をつけることになるということが、履修生の実感として裏付けられた。スピーキング力に関しても、上演後には一定の上達が確認できた。さらに、SPの授業が、英語に触れる、英語母語話者との会話、プレゼンテーションといった学生たちが効果的と考えている英語学習の機会を提供していることも確認された。以上の結果と考察から、本学におけるShakespeare Productionの授業と上演は、英語の技能の側面からも、4年間の学習成果の集大成だと自他ともに確認できる機会となりうると考える。

7. 今後の展望

英語スピーキング力の向上を期待し本英語英文学科に入學してくる学生が多いにもかかわらず、4年次の最初の段階でスピーキングを得意と考える学生は全体の1割にも満たない。このことは、スピーキング力の底上げのための指導方法の工夫が英語英文学科にとって重要な検討課題の一

つであることを示している。さらに、ストラテジーに関する考察から、4年次生になった段階で英語学習における「自分にあった練習の仕方がわからない」と考えている学生が多数いることがわかったことは、英語指導の在り方に大きな課題を示している。1～2年次生の少人数制のクラスでスピーキングに特化した英語の授業が提供されているにもかかわらず、3～4年次生のスピーキング力向上のための自主学習につながるストラテジーの定着が認められない。この理由の一つとして、授業で提示されるスキル向上のタスクに関連して、汎用的なストラテジーとしての活用方法が明確に学生に伝わっていないことが考えられる。また、ライティングの指導に比べてスピーキングの指導の場合は、学習のプロセスや成果を「記録」として残しにくいいため、学生にとって振り返りや繰り返し練習の手段が限定される。自分のスキルの問題点が確認できない限り、効果的な練習は期待できない。SPの場合、舞台制作の進捗状況を知るため、リハーサルをビデオ撮影し練習成果を記録している。このことが、発音も含めた各自の英語の発話を確認し、指導者や仲間との振り返りを通して英語音声表現を上達させる機会となっていることは明らかである。従って、スピーキングの授業においても、何らかの形で訓練の記録を残すことができれば、学習者が自らの発話能力の課題を認識し、伸びを確認しやすくなるのではないだろうか。本研究の結果は、言語習得のためのストラテジーを視野に入れた集中的な英語音声表現の訓練によってスピーキング力が向上する可能性を示唆したといえよう。

注

注：本研究は2016年度同志社女子大学研究助成金（共同研究）「Shakespeare Production履修生にみるSpeaking力の変化－動機づけと集中的な英語表現の訓練がもたらす効果に関する考察－」の研究成果報告である。

1. 引用元 (<http://www.global8.or.jp/whatsopic01.html>) の表中には「英約」とあったが、「約」とすべきだと考え、修正した。

引用文献・参考文献

- 同志社女子大学. (2000). 『同志社女子大学125年』 日本写真印刷株式会社.
- 日高真帆. (2012). 「英語劇の上演と大学教育への応用」 英

文学論叢, 56, 10-17.

桑山智成. (2009). 「シェイクスピア原語上演が英語学習に与える意義について」 *Asphodel*, 44, 21-39.

奥村義博. (2004). 「英語劇上演をめぐる一第一回ゼミ公演から」 *松山大学言語文化研究*, 24 (1), 1-17.

Oral Proficiency Interview-computer (OPIc). The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL): 全米外国語教育協会, <http://www.global8.or.jp/whatsopic01.html> (2019年5月1

日閲覧)

丹羽佐紀. (2012). 「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察：効果と課題を探る」 *鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要*, 22, 75-81.

吉本和弘. (2018). 「『アクティブ・ラーニング』としての英語劇：シェイクスピア作『十二夜』上演の場合」 *県立広島大学総合教育センター紀要*, 3, 35-51.

〈資料1〉

英語学習に関する意識調査 (2017)

この調査は、あなたが「大学においてどのレベルまで英語力向上を目指しているか」また「期待しているか」について尋ねるものです。英語力向上や英語音声表現（英語で作品を理解し表現すること）について、あなたの考え、抱負、姿勢、取り組みについて、普段の学習状況をもとに答えてください。なお、この調査の結果があなたの成績などに影響することは一切ありません。回答は全て該当するものをHBの黒鉛筆またはシャープペンシルでマークしてください。「その他」については、マークシート「自由記述欄」に自由に記入してください。

※マークシートに、氏名、学籍番号を記入し、マークしてください。

【1】 あなたの直近【1年以内】のTOEICの獲得スコアはどれくらいですか。①～⑨より選んでください。

- ① 250点未満
- ② 250点以上～350点未満
- ③ 350点以上～450点未満
- ④ 450点以上～550点未満
- ⑤ 550点以上～650点未満
- ⑥ 650点以上～750点未満
- ⑦ 750点以上～850点未満
- ⑧ 850点以上
- ⑨ 覚えていない

【2】 英語の4つのスキルについて、あなたが現在「最も苦手」とするのはどれですか。1つ選んでください。

- ① = Reading
- ② = Writing
- ③ = Listening
- ④ = Speaking

【3】 英語の4つのスキルについて、あなたが現在「最も得意」とするのはどれですか。1つ選んでください。

- ① = Reading
- ② = Writing
- ③ = Listening
- ④ = Speaking

【4】 【3】で選んだ「得意なスキル」について、現在のレベルに至るために個人で行ったどのような工夫や学習方法が効果的でしたか。あてはまるものをマークしてください。(複数選択可)

(Individual 型)

- ① 語彙を意識的に増やす
 - ② 文法の復習をする
 - ③ 英語に触れる(バイリンガル放送・英字新聞・英語のサイトを利用する)
 - ④ 英語で物語や小説を読む
 - ⑤ ラジオやテレビの英語講座を利用する
 - ⑥ 映画やDVD、テレビ・ラジオ番組を英語で視聴する
 - ⑦ 洋楽を聞くと、歌詞を確認する
 - ⑧ (英語の教科書や英語で書かれた本などの)音読を心掛ける
 - ⑨ 英語で文章を書く(日記、メモ、レポート、スピーチなど)
 - ⑩ 言語に関係なく、情報や知識を得るために知見を広める
- その他(マークシートの自由記述欄に【4】と書き、記入してください)

【5】 【3】で選んだ「得意なスキル」について、現在のレベルに至るためにどのようなコミュニケーション型の練習が効果的でしたか。あてはまるものをマークしてください。(複数選択可)

(Communication 型)

- ① 語学教室に通う
 - ② オンラインで英語のレッスンを受ける
 - ③ 英語でプレゼンテーションをする
 - ④ 英語母語話者とコミュニケーションを図る
 - ⑤ 英語を共通語としてコミュニケーションを図る
 - ⑥ SNSを利用し英語でやりとりする
 - ⑦ Skype など利用し英語でやりとりする
- その他(マークシートの自由記述欄に【5】と書き、記入してください)

【6】 【2】で選んだ「苦手なスキル」について、なぜあなたは苦手だと感じていると思いますか。あてはまるものをマークしてください。(複数選択可)

- ① 練習しないから
 - ② そのスキル自体が好きでないから
 - ③ そのスキルに重要性をあまり感じないから(優先順位が低いから)
 - ④ 努力しても無駄だと思っているから
 - ⑤ 努力していてもなかなか結果として表れないから
 - ⑥ 自分に合った練習の仕方がわからないから
- その他(マークシートの自由記述欄に【6】と書き、記入してください)

次の【7】～【15】の各項目について、卒業までにどのぐらいのレベルに達したいと思いますか。

中の①～③の基準を使ってそれぞれ答えてください。

- ① = 辞書やアプリを「使いながら」伝え、また理解できるレベルまで到達したい
- ② = 辞書やアプリを「使わずに」伝え、また理解できるレベルまで到達したい
- ③ = すでに満足のいくレベルに達していると感じている

【7】 時事ニュースを活字や映像で理解する

【8】 雑誌やWEBサイトの情報を理解する

【9】 映画やミュージカルなどを鑑賞する

【10】 身近な話題について伝え、また理解する

【11】 旅行で買い物や食事をしたり、行き先を尋ねたりする

- 【12】 海外で日常生活を送る
- 【13】 海外で勉強や仕事をする際に専門分野について伝え、理解する
- 【14】 プレゼンテーションの資料を準備し、理解する
- 【15】 ディスカッションに参加し、発言する

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

〈資料2〉

S P 公演終了後の意識に関するアンケート調査

この調査は、英語劇の上演と英語力の関係について、学生の皆さん自身の考えをおたずねするものです。4月から上演までの7か月間にわたるご自身の経験を振り返って答えてください。なお、このアンケートの回答は、授業の評価とは一切関係がありません。

1. 第67回Shakespeare Production（以下SP）において、あなたはどのような形で参加しましたか。
下の①～④から一つ選び○をつけてください。

- ① キャスト専任
- ② スタッフ専任
- ③ キャストとスタッフ兼任
- ④ ADあるいはコミッティー

2. あなたはこのS Pを通して、どのように英語と関わってきましたか。費やした時間や頻度の高かった順から4 ➡ 3 ➡ 2 ➡ 1の順で（ ）に数字を書いてください。該当しないものについては「0」を書いてください。

- ① 読む----（ ）
- ② 書く----（ ）
- ③ 話す----（ ）
- ④ 聴く----（ ）

3. 4月と現在（公演後）で「英語を使うこと」に対する態度や考え方に変化があったと感じますか。①～④の中から一つ選んでください。

- | | | | |
|---------|---------|---------|----|
| ある | どちらかと | あまり | ない |
| | 言えばある | ない | |
| ④ ----- | ③ ----- | ② ----- | ① |

4. 次の①～⑥について4月と現在（公演後）を比べ、該当するものにすべて○をつけてください。

- ① （ ） 英語を読むことに抵抗がなくなった
- ② （ ） 英語を書くことに抵抗がなくなった
- ③ （ ） 英語を話すことに抵抗がなくなった
- ④ （ ） 英語を聞くことに抵抗がなくなった
- ⑤ （ ） S P以外の授業でも、英語を使うことに抵抗がなくなった
【さしつかえなければ、具体的な例を示してください】

- ⑥ （ ） 授業・学校以外の場面でも、英語を使うことに抵抗がなくなった
【さしつかえなければ、具体的にどのような場面や状況か教えてください】

5. 「英語で演劇を上演する」という授業は、英語力の向上に効果があると感じましたか。

①～④の中から一つ選んでください。

ある	どちらかと	あまり	ない
	言えばある	ない	

④ ----- ③ ----- ② ----- ①

6. 「設問5」における回答の理由を、さしつかえなければ教えて下さい（自由記述）。

7. SPの授業を通して、「言語学習」という観点から役に立ったと思うものを選び、○を付けてください。（複数回答可）

- ① () 語彙力
- ② () 英文を読み込む力
- ③ () 日本語と英語の表現の違いについて
- ④ () 文法力
- ⑤ () 個々の単語の発音
- ⑥ () まとまった英文の発話
- ⑦ () 発話に伴う音調（声の調子・発声）変化
- ⑧ () 英語の文化的背景
- ⑨ () その他（具体的に：

8. その他、何かあれば自由に感じたことを書いてください。

ご協力いただきありがとうございました。